



およそ100年前、世界的な大流行となった“スペイン風邪”では医療の不十分さに加えて第一次世界大戦中でもあり、多くの犠牲者がでました。今回の新型コロナウイルスの広がりにより予定の取り組みが中止となったり、各学校も2月で授業が切り上げられています。戸惑いや落胆もあります。外出も制約されたり躊躇したりで気分も減入りがちですが、何とか乗り切っていけば吉兆を告げるという麒麟(きりん: 想像上の動物)が現れるかもしれません。



織田信長の花押

「麒麟」の“麟”を意匠化したものと伝えられています。
(佐藤進一「花押を読む」)

日差しと古民家

普段あまり気に留めていない部分かもしれません。^{のき}軒や^{ひし}庇の深さです。現代住宅のそれらは家屋のどの方角でもあまり違いません。ところが古来の日本建築物のそれらは、方角によってかなり異なります。例えばレイクタウンにある旧東方村中村家住宅主屋^{おもや}の場合、次のようになります。(方角は寄贈移築前のもの)

- ◆北側 約 70~90 cm
- ◆土間^{げや}南側下屋の庇 約 260 cm
- ◆土間東側 約 70 cm
- ◆式台付玄関(南側) 約 180 cm
- ◆奥の間南側縁側庇 約 110 cm
- ◆奥の間西側縁側庇 約 110 cm



式台付玄関



土間下屋



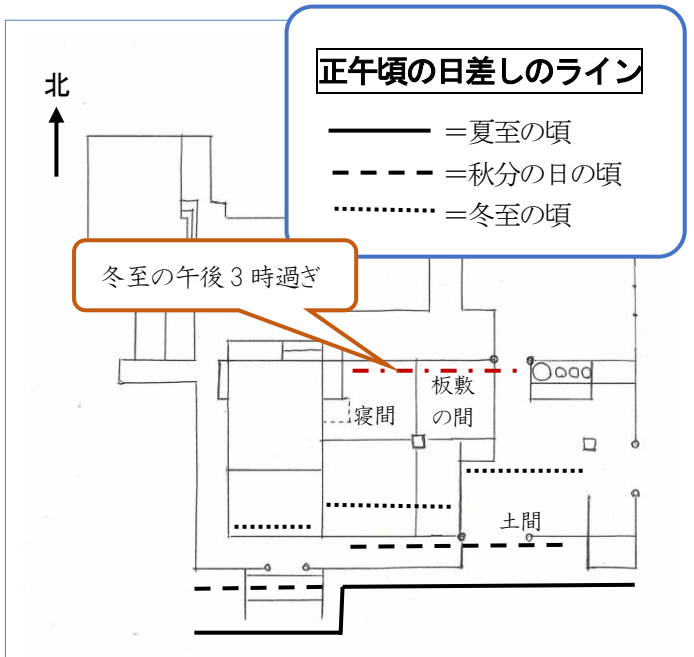
座敷南側

一方、大間野町旧中村家住宅では日差しが建物のどこまで入るかを検証してみると、下の図のようになりました。夏至、秋分の日、冬至の日のそれぞれ正午頃の日入り方です。冬至の日の午後3時過ぎには、日差しは寝間や板敷きの間の北側にまで届いていました。

この検証によって、夏は湿気や強い日差しをできるだけ遮るように、冬は部屋の奥にまで日差しが届くように計算して軒や庇の深さが考えられていることがわかりました。また冬は屋内での作業も多くなることから、土間の奥にまで日差しが届くようになっていました。

日本建築は一般に軒が深いのが特徴です。仏教と関わりのある多重塔は、乾燥が強い中国内陸部では石材で浅い軒であるのに対して、温暖で多湿な日本のそれは木材で深い軒です。深い軒の屋根は柱や梁に大きな荷重がかかります。その深い軒を支える工夫・匠の思想と技がそこにはあります。

中村家住宅を訪れた小学生や外国人は、土間の上に架けられている太くて曲がった梁に強い印象を受けます。木材同士の結合には基本的に釘を使っていないことに更に想いを深くします。



観て、触れて、聴いて学ぶ

優れた芸術、例えば絵画や音楽、演劇などからエネルギーをもらったというご経験のある方もおられるでしょう。同様に、古文書や出土品、民具など史料の持つ力というものを、時々感じることもあります。こういう経験は、そういうものに造詣の深い人や人生経験の長い人はもちろんですが、そういう人ばかりではないという例えをご紹介します。

小学1年生用の国語の教科書に「たぬきの糸車」という教材があります。このほど市立川柳小学校では市域の方が寄贈してくださった糸車（旧東方中村家住宅にて展示）を使つての授業が行われました。その授業を終えての感想文を生涯学習課に頂いたので、その中からいくつかをご紹介します。

- ★おかみさんになった気分だった。
- ★いい音だった。
- ★たぬきの気持ちやおかみさんの気持ちがわかった。
- ★たぬきが糸車をまわしたいんだ、ということがわかった。
- ★回してみても意味がわかって、うれしかった。
- ★おかみさんが糸をつむんでいる時、たぬきが目玉を回していることがおもしろい。

たぬきの糸車(あらすじ)

作:きし なみ

山おくできりをしてくらす夫婦がいました。毎晩たぬきが来ていたずらするので、きりはわなをしかけました。

ある晩、おかみさんがキーカラカラ キークルクルと糸車を回して糸をつむいていると、破れしよじの穴からたぬきのがぞいて見ていました。

ある夜、たぬきがわなにかかっているのを見て、おかみさんは逃がしてやりました。

やがて冬になり、夫婦は里の家におりていきました。春になってまた山小屋にもどってみると、山のように糸の束がつんでありました。ふしぎに思いながらごはんをたいていると、キーカラカラ キークルクルと音が聞こえてきました。びっくりしてのぞいてみると、たぬきが糸車で糸をつむいでいました。

たぬきはおかみさんに気がつくと、びよこんと外にとびおりましたそしてうれしそうにおどりながら帰っていきました。

再現シーン



覗いているタヌキ役の児童

糸車そのものは写真でも理解できますが、実際に回してみながらおかみさんやたぬきに共感していった様子が伝わってきました。糸車の実物を観て、それに触れて、回る音を聴いて、五感を使って学習した成果が、上記の感想に表われています。史料の持つ力を感じると共に、それを生かして下さった川柳小学校の先生方に感謝申し上げます。

越谷でも綿を生産していた

なお、2つの中村家住宅では昨年5月から11月まで綿を栽培して収穫しました。毎日世話をした当館の職員は、「だんだん可愛くなってきた」と言っていました。また、栽培を始めた当

初から最近まで、5、6回も成長の様子を見に来て下さった市民の方もいらっしゃいました。

明治初期、市域では以下のように綿の生産と他地域への輸出が行われていました。（「武蔵国郡村誌」第11巻）

【市域の綿の生産】

・ <small>せんびき</small> 千疋村	65 貫目	・別府村	25 貫目
・四条村	50 貫目	・ <small>ちんどう</small> 南百村	17 貫目
・見田方村	900 貫目	・東方村	13.6 貫目
・向畑村	420 貫目		

1 貫目=3,750 g ですので、見田方村 900 貫目というのは 3,375 kg ということになります。この記録は「明治8年以前」ということですので、江戸時代末期にもこれくらいの生産をしていたと思われます。

